神 山 町 の 方 言

方言班（徳島方言学会）　金沢　浩生[1)]・仙波　光明[2)]
岸江　信介[2)]・石田　祐子[3)]

1．はじめに

神山町は、方言区画の面からは下郡（しもごおり）に属する。すなわち徳島市などと共通の特徴を持つ地域とされてきた。例えば、アクセントなどの発音面に関しては、基本的に徳島市と同じであり下郡の性格を備えている（音韻（いん）の項参照）。森重幸が1962年に行った阿波学会での報告によると、文法面では、徳島市に多い強調の「ジョ」はあまり使われないようであり、羽ノ浦から阿南市方面で現れる「ジョ」も使われていないようである。一方、疑問の終助詞には、「コ」が使われており（例えば、「行くか？」を「行くこ？」と言う）山分（さんぶん）と共通の特徴が見られる（図１）。また、可能表現に使われる副詞には、「ケッコー」「ミジョー」の両方が報告されていて、上郡（かみごおり）・下郡双方の特徴を持っている（図２）。

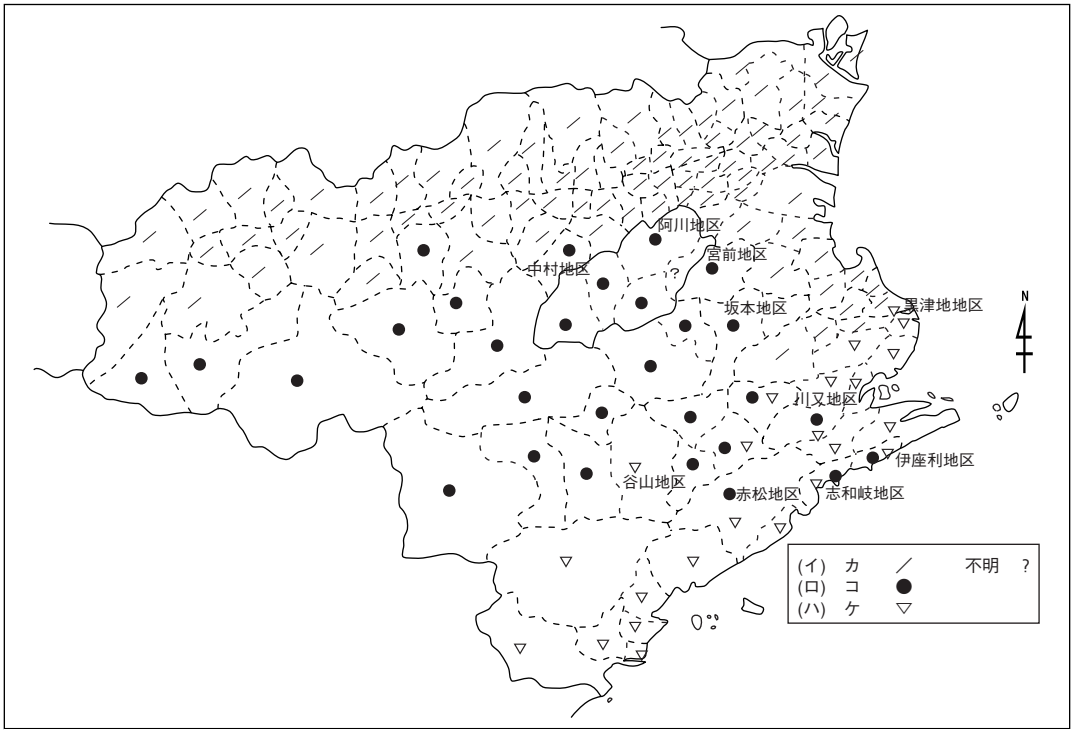

図１　疑問の終助詞「カ・ケ・コ」の分布（森　重幸）

1）四国大学短期大学部　2）徳島大学総合科学部　3）徳島大学総合科学部学生

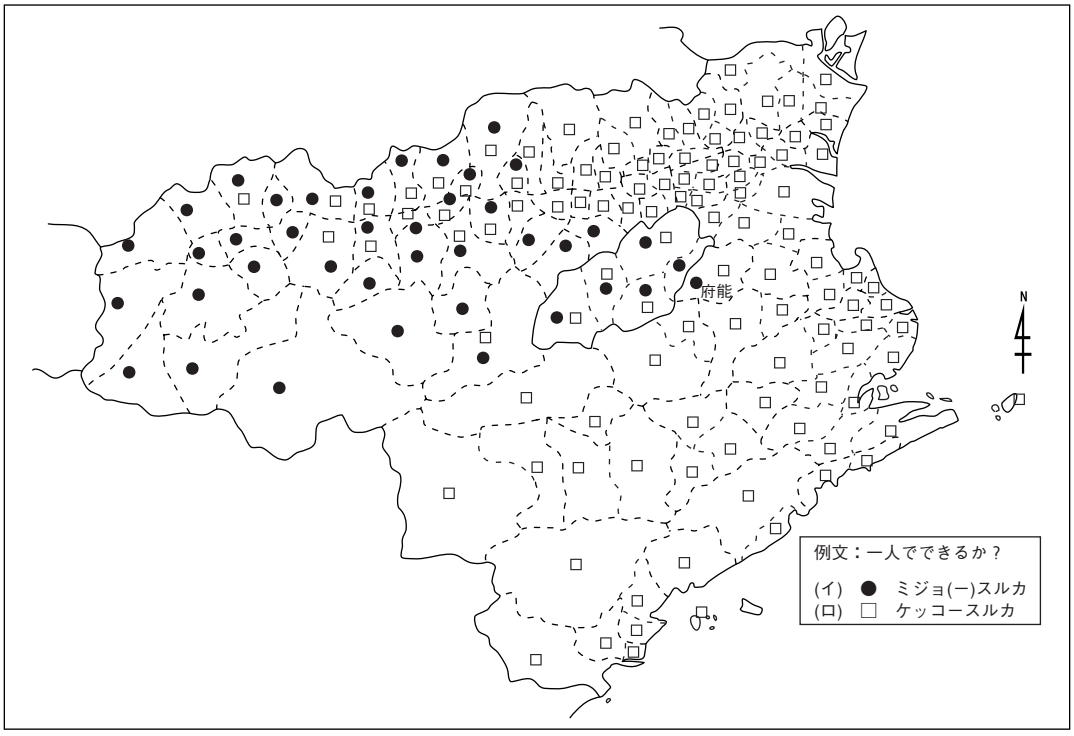

図２　可能表現、ケッコー・ミジョーの分布（森　重幸）

神山町の方言区画上の位置を、もう少し詳しく見ておこう。徳島県の方言区画は森重幸（森　1982など）によって精密に検討されている。それによると次のようになる。

徳島県は、①山分（祖谷・山城・一宇・木頭・木沢・上那賀）、②上郡（三好・美馬）③下郡（阿波・麻植・板野・鳴門・徳島・名西）、④うわて（勝浦・那賀・小松島・阿南）、⑤灘（海部）の五つに大きく分けられる。このうち、②上郡から④うわてにかけての地域は、山分寄りの「中分」と、それ以外の「里分」に分けられている。

「中分」に属するのは、上郡が、三好山地（佐馬路、井内谷など）、美馬山地（八千代、古宮など）、下郡は、麻植山地（木屋平）、名西山地（美郷村中枝、神山町など）、名東山地（佐那河内）。うわてが、勝浦山地（高鉾、福原など）、那賀山地（鷲敷、相生など）となっている。

神山町の言葉は、下郡の諸特徴と共通するだけでなく、美郷や木屋平等を経由して上郡中分の要素の一部を共有し、相生や勝浦との行き来によってうわて中分との共通点を持つに至ったと言えそうである。また、かつて川田（山川町）方面からは紙漉職人が多く来ていたといわれ、その影響も考えられる。

この稿では、神山町で作られた方言集に収められている語彙の検討を通して、そのような性格がとらえられないかを検討することを主要な課題とする。

2．発音から見た神山方言

1）音韻（アクセント）

アクセントは徳島市式であり、従来と目立った変化はないようである。すなわち、調査票に示された各語を読み上げてもらう方法により1999年に石田が行った調査（図３）は、森重幸（1957、1989）の調査結果を再確認する結果になっている。アクセントによる方言区画を考えるときに、基本的な項目として使われている２拍名詞を例に取れば、次のようである。上に線がある部分が高く発音される。助詞「が」を付けた形で示す。

第１類	タケガ（竹）	クニガ（国）	ウシガ（牛）
第２類	ウタガ（歌）	オトガ（音）	ユキガ（雪）
第３類	ウデガ（腕）	オニガ（鬼）	カイガ（貝）
第４類	イタガ（板）	アトガ（後）	ソトガ（外）
第５類	アセガ（汗）	サルガ（猿）	アメガ（雨）

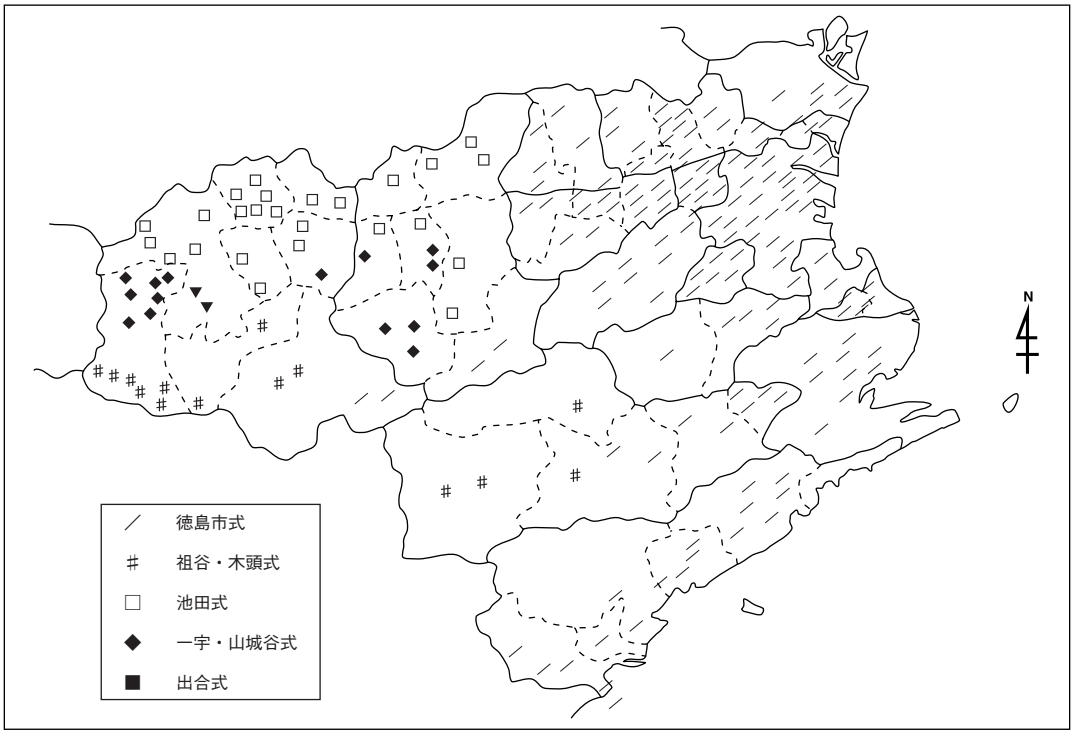

図３　徳島県アクセント地図（石田祐子）

なお、若年層（高校生以下）を対象とした組織的な調査はしていないが、神山町出身者との会話を通じて、そこに現れるアクセントを観察した結果から、徳島市と同様の変化（上野・仙波　1993）が進んでいることが推測できる。例えば、「起きる」、「食べる」など

の３拍動詞では、１拍めを高く発音する高起式から、終止形の場合、３拍目が高く発音される低起式への変化が進んでいるものと思われる。すなわち、オキルという発音から、オキルへの変化である。

２）音韻（その他）

その他の、音声的特徴については調査票による調査はしなかったが、調査に協力してくださった方々の談話に現れた発音上の特徴をいくつか述べておく。

⑴　昭和一桁生まれ世代に、合拗音クヮ［kwa］・グヮ［gwa］がまだ残っている。クヮジ（火事）、ショータレグヮンス（しょうたれ頑子＝不潔な奴）など。

なお、合拗音から直音への変化はかなり早くから進行していたと見られる。日本言語地図によると、神領では、ショーガツ（正月）の「GA（ガ）」の音は、直音であった。また、方言集、たとえば「神領の方言」（1960）にはトングヮ（唐鍬）と合拗音を含む形が見られるが、「神山の方言」（1990）ではトンガと直音を持つ形で書かれている。「神山の方言」の編集に携わった方たちの年齢を思えば、その中にはグヮの発音を保存している人がいてもよかったはずであるが、合拗音の形は採用されていない。「神領」のドングヮンも「神山」ではドンガンである。この事実は、発音の反映と言うよりは、ある種の「仮名遣い」が実行されていることの結果を示すと解釈した方がいいのかもしれない。

⑵　セをシェ、ゼをジェと発音することは目立たないか、またはほとんどない。日本言語地図では、県下の大多数と同様、シェ、ジェで報告されている。

⑶　濁音の前の鼻音が多く聞かれた（仮にそれを小さな「ン」で表すことにする）。

スミレノ　コトンデス（ことです）、クンドイ（くどい）、オンドロク（驚く）

この現象は、ダ行音の前に現れやすいようである。これは高齢者の発音として県下で広範囲に観察できる。

３．語彙から見た神山方言

１）「方言集」から方言語彙の特徴を見ることの問題点

日本各地で作られている方言集は、当然のことながら、それを作成した人によって「方言」と意識されたものが記録されているのであり、しばしば共通語と判定して差し支えない語が収められている。逆に、意識に上らなかったり、分量の制約から記録されるべき言葉が掲載できなかったりすることもまれではない。

また、それぞれが共通に設定された項目について記述を行っているわけでもないため、特定の語彙項目（単語）が「あるかないか」という判定はできない。さらに、ある方言集に記録がないからと言って、その地域でその言葉が使われていないと断定的に言うことはできない。

したがって、方言集に記録された語句の比較からは、それぞれの地域の方言の特徴を、白か黒かといったはっきりした形で浮かび上がらせることは困難であると思われる。

しかし、その一方で、強く方言と意識された言葉、日常的に口に上ることの多い言葉が方言集に記録されやすいと言えるとすれば、やはり、そこにはおのずからそれぞれの地域の方言の特徴が現れているのではないだろうか。

2）神山町の方言集

神山町では、四つの方言集（「鬼篭野の方言」1995（平成７）年・「神領の方言」1960（昭和35）年・「上分の方言」1978（昭和53）年・「神山の方言」1990（平成２）年〔各村誌、および『神山の方言と言い伝え』所収〕）が編集されている。

これらの方言集の見出しを総合すると、2313項目になる。この見出しは、ほとんどが語彙項目であるが、句や文相当の単位（イカンデカイ、ホリャホージャ等）、接尾語（～ハン、～ハザミ等）をも含んでいる。それぞれの方言集の見出し数を個別に見ると、「鬼篭野の方言」193、「神領の方言」1163、「上分の方言」785、「神山の方言」1516となっている。

3）方言集による神山町の方言語彙と上郡・うわて方言語彙との比較

この稿では、2313の項目について、『池田町誌』『山城の方言』『ひがしいやの民俗』『井川町誌』『一宇村誌』『総合学術調査　半田町　阿波学会紀要第38号』のそれぞれに収められた方言集の語彙とを比較することによって、神山方言の語彙的な特徴（今回のそれは、主に上郡山分に対してということになるが）を浮かび上がらせることが、どこまでできるかを試みた結果の一部を述べることになる。なお、徳島県全体をカバーするものとして、金沢治『阿波言葉の辞典』をも比較検討のために用いた。また、うわてとの比較のために、「羽ノ浦の方言」（『羽ノ浦町誌』所収）等も使用した。

神山町の諸方言集（以下、「神山」と表現する）と上郡の諸方言集（以下、「上郡」と表現する）を統合したものとを比較すると、双方に共通して１回でも出てくる言葉は、546であった。これは「神山」収録語句全体の24％弱でしかない。「神山」にでてくる残りの1767項目が、「上郡」には見られないことになる。しかし、これは神山町と上郡諸地域の間で共通する言葉が、それほどまでに少ないということではない。

方言集を比較してみると、共通する項目が意外と少ないということは、ほかの例でも確認できる。かつて、金沢治『阿波言葉の辞典』、高田豊輝『徳島の方言』、橋本亀一『阿波の國言葉』の収録語彙を比較した結果の報告を聞いたことがあるが、はじめの４分の１あたりまでで、三者に共通するのは、ほぼ30％程度であった。

以下、順次、検討の結果を述べる。

⑴　「上郡」のすべてに現れる語

下の表１には、「上郡」のすべてに現れる語が「神山」ではどうなっているかが示されている。

表１　「上郡」方言集のすべてに現れる語の「神山」での出現状況

見出し	方言	神領	鬼籠	上分	神山	金沢	半田	一宇	東祖	井川	池田	上郡
セコイ	1	1	1	1	4	○	1	1	1	1	1	5
オンビキ	1	1		1	3	○	1	1	1	1	1	5
ツベ	1	1		1	3	○	1	1	1	1	1	5
テンゴー	1	1	1		3	○	1	1	1	1	1	5
ゴウト	1	1			2	○	1	1	1	1	1	5
テノゴイ	1				1	●	1	1	1	1	1	5
ミジョスル				1	1	○	1	1	1	1	1	5

（注）　各欄は、それぞれ次を示している。
方言＝神山の方言、神領＝神領の方言、鬼篭＝鬼篭野の方言、上分＝上分の方言、神山＝方言～上分の合計、金沢＝阿波言葉の辞典、半田＝阿波学会紀要、一宇＝一宇村誌、東祖＝ひがしいやの民俗、井川＝井川町誌、池田＝池田町誌、上郡＝半田～池田の合計。
なお、各方言集の欄に１とあるのは、それぞれの方言集に見出し語として見られることを示す。「神山」の欄に例えば３とあるのは、４種の内３種の方言集に収められていることをあらわす。また、金沢の欄の○は含まれていることを、●は含まれていないことをあらわす。

この表から「セコイ」が双方のすべてに収められていることが分かるが、今回調査したすべてに出てきたのは、この１語だけであった。

他に、双方で４点であった語は「イタイ（熱い）」「ヘラコイ」「ヤケハタ（火傷（やけど））」の３語である。

一番下の「ミジョスル」は、神山町が上郡山分と下郡・海部の境界になっていることを示す、もっとも明らかな例である。

このミジョ・ミジョーは、ケッコーと違って、「必ずやり遂げるか？」という強い問いかけの場合に使うとのことであった。もうあまり使われなくなっているそうだが、上郡（例えば半田）と異なり、大人に対しても使うそうである。もちろん、目下に使うことの方が多い。平成11年12月５日、神山町農村環境改善センターで開かれた総合学術調査報告会の席では、聞いたことがないという声が聞かれた。昭和37年の森重幸の調査では確認されており、また、今回の調査でも、その用法についてのご教示をいただくことができたが、消え去りつつある言葉なのであろう。石田の行った佐那河内の府能（ふのう）地区での調査でも、神山出身者の用語であるという情報を得ている。

「ミジョ」とよく似た結果が得られたのは「ヒダルイ／フダルイ」（空腹）である。「上郡」には、池田を除いてすべてにフダルイがあるが、ヒダルイはない。逆に、「神山」では、「上分」にフダルイがあるが、その他にはない。この語は、おおまかに見て上郡でフダルイ、下郡・海部等でヒダルイのようである。

⑵　「上郡」には出てこない語

「神山」ではすべてに出てくるが、「上郡」には出てこない語としては次の25語が得られた。

アバサカル（ふざける）、エクソイキ（無茶苦茶に）、エット（長い間）、キノメモヤシ（木の芽が出るころの雨）、クジュム（うずくまる）、クラワス（殴る）、ケタツ（踏み台）、ケンタイ（当然のように）、ゴジャブロウ（冗談・間違い）、ザマク（粗雑な）、シワシワ（ゆっくり）、タロウトル（完備している）、ツブロ（彼岸花）、トナリハタ（隣近所）、ニッチモサッチモ、ハチコル（はびこる）、ヒコズル（引きずる）、ヒダルイ（空腹）、マクル（嘔吐）、マルタ（全部）、ヤネ（腕）、ユサクル（揺る）、ヨバレ（寝小便）、ロースイ（雑炊）、ロクスッポ

これらの語のうち、ゴジャブロウ、ザマク、タロウトル、ツブロ、トナリハタ、ニッチモサッチモ、ヒコズル、マクル、ロクスッポを除く16語が『羽ノ浦町誌』と共通である。

タロウトルは、「金沢」にはあるが、他の資料では確認できなかった。マクルも他で確認はできなかった。ツブロは、佐那河内、木屋平、三名に記録がある。なお、ニッチモサッチモ、ロクスッポは共通語として使われているが、これを収める方言集は他にもある。

ケンタイ、シワシワ、トナリハタは「上郡」方言集には採られていないが、実際には使われている。キノメモヤシは、山川町誌にも見られるが、東祖谷ではキノメオコシである。

アバサカル、エクソイキ、エット、ヤネは下郡や県南と共通する語と見ることができるようである。

⑶　「神山」より「上郡」が少ない語

「神山」では４点だが、「上郡」では１点であった言葉は、次の10語である。アソーザ（朝のうち）、オリカニ（時々）、キリブサ（くるぶし）、クエル（崩れる）、ゲト（最下位）、コスイ（ずるい）、セングリ（次々に）、マケル（あふれる）、モトル（口達者）、ワサ（輪）。

これらは、「上郡」でたまたま収録されなかったと考えられるものが多い。ゲト、コスイ、セングリ、マケルなどは上郡でもしばしば耳にする言葉である。

「神山」４点、「上郡」３点であったのは、カザム（においをかぐ）、グチナワ（蛇）、スエル（饐える・腐る）、トエル（泣き叫ぶ）、ネブル（なめる）、ヒンズ（余分）、マガル（邪魔になる）の７語。

「神山」３点、「上郡」３点となったのは、アサイキ（早朝）、イカキ（ざる）、ウタテイ（面倒くさい）、ウッチャ（私）、オトロシイ（恐ろしい）、カイケ（欅）、カザ（におい）、カマツカ（露草）、コマイ（小さい）、コワル（痛む）、ツバエル（増長する）、ドクレル（すねる）、トヒ（嘘）、ハナシバ（樒）、ハメ（蝮）、フルツク（梟）、ベロ（舌）、マツボリ（へそくり）の18語である。

これらのうち、ベロは小型の国語辞典にも簡単に見つかる語であって、共通語として通

用している。俗語的であるために、方言という判断がされがちな語の一例である。

(4) 小型国語辞典で確認できる語

アイソモコソモナイ（愛想も小想(こそ)も尽き果てる、の形で)、イッチョラ（一張羅)、オキ(熾)、オタユーサン（太夫＝タユーで)、カラゲル（裾(すそ)を―)、クイサシ（接尾語サシ)、ダマカス（騙(だま)す)、ツイ、ツレアイ、テンテコマイ（天手古舞)、ヌカス（言う)、ヒッタクル（引っ手繰る)、ヒトキリ（一切り)、ヒネ（古、ヒネマイなど)、ヘズル、モンビ(紋日)、アヤフヤ、ツイゾ、ナンボー（なんぼ)、ネッカラ、ムシル、ユスグ（濯ぐ)、ヨバレル（ご馳走(ちそう)になる)。

(5) その他

蛇足のおそれを省みず、ここにいくつかのことがらを付け加えておきたい。今回の調査を通して、神山の言葉の中に、オヤカゼ（親風)、シオッセ（為教え)、サオカタギ（台風時の雨足）のような残しておきたい言葉を発見することができた。また、お茶菓子を勧めるときの「ツケテクダサイ」という表現に気づいたが、その後の調査で、これは上郡山分地域ではふつうに使うらしいこと、脇町でも使われることが確認できた。下郡や県南地区については未確認である。

また、落雷に関して、「神領村誌」には「雷があまる」という例文が添えられていて、これは「うわて」と共通する点であるが、「あまる」は使わず「雷がへだれる」と言うのだという報告もあった。

4．神山方言語彙抜粋

この項では、「神山」の方言の内、「上郡」に現れない語を中心に取り上げることとするが、２で取り上げた語はできるだけ割愛する。比較対照表で「上郡」が０点であり、「神山」が３点の語（112語）を優先するが、小型国語辞典に見られる語は、そのリストを末尾に収めることとする。「神山」が２点、１点の語については、『阿波言葉の辞典』にないものを優先する。その他、「上郡」に出ているが、意味が異なる語はここに採用した場合がある。その語には＃印を添える。出典は、それぞれ次のように示す。〔神〕＝「神山の方言」、〔領〕＝「神領の方言」、〔鬼〕＝「鬼篭野の方言」、〔上〕＝「上分の方言」、〔羽〕＝「羽ノ浦の方言」、〔阿〕＝『阿波言葉の辞典』。『阿波言葉の辞典』にないものには、＊をつける。また、※印を付けて注を付すことがある。品詞の表示は、名＝名詞、形＝形容詞、形動＝形容動詞、動＝動詞、副＝副詞、とする。また、句および文の形を見出しとしたものには、（句）と表示する。

特徴的な神山方言語彙

アイシ（名）　仲間同士。〔神・上・領＊〕

アイフサイ（形動）　ものにより、合う合わない、適不適があること。〔神・上＊〕※アイブサイの形で高知県長岡郡や三重県鳥羽でも記録されている。

アエル（動）　穀物や草の実が自然に、または病虫害のために落ちる。〔神・領・上〕

アシラウ（動）　病気の養生をする。〔神・鬼・上＊〕ムリセント　アシライナハレヨ。※オアシライナハレ〔神・上〕という見舞いの言葉は、半田でも使われる。

アンゼナ（名）　あだ名〔神・領・上〕。

アンゼル（動）　案じる。心配する。〔神・上＊〕※〔阿〕に、「アンゼ＝心配性な人」がある。

イキズム（動）　息を詰めて腹に力を入れる。息む〔神・領・上〕。

イガメル（動）　曲げる。イガムの他動詞形。〔神・領・鬼＊〕※イガムは北方の語形。南方はエガム。

イッキャク（名）　夕涼みなどに使う木製の大きな腰掛け。縁台。〔神・領・上〕

イッケ（名）　親類。〔神・領・上・羽〕※県南はイッケ・イッケン。美郷のあたりもイッケを使う。東祖谷にイッケシがあるが、上郡ではウチマがふつう。山川では、イッケとウチマの両方が使われるらしい。なお、〔神〕に「うちま　身内の人」とあるが、ウチマは家族やごく近い親類を指して使うようである。

イングリチングリ（形動）　不揃（ぞろ）い。ちぐはぐなさま。〔神・領・上〕※広い範囲で使われる。

ウタイマイ（形動）　機嫌がよく、有頂天の様子。ウタイマエとも。〔神・鬼〕

ウタセ（名）　融通。〔神・領・鬼＊〕※〔羽〕にウタセヲキカス（一時しのぎをする。食いつなぐ）がある。

ウチニワ（副）　以前には。昔は。〔神・領・鬼＊〕※他では未確認。類義語としては、〔阿〕にウチマエがある。

ウマエル（動）　（湯などを）水で埋める。〔神・領・鬼〕※『山城の方言』に「湯を水でうすめる」とある。〔阿〕には、「差し水をする。海部・出羽」と。

オーギレ（形動）　気前がよいこと。気が大きいこと。〔神・鬼・上〕※〔阿〕によれば、木屋平はオーギレイと形容詞になっている。

オーゲトーゲ（名・形動）　平気。当然。〔神・領・鬼〕※ケンタイと同義語か。〔阿〕には、「実力がないのに自信ある態度」とある。

オーボル（動）　（子供などを）可愛がる。かばう。〔神・鬼・上〕※岩倉では、火が燃え広がること。〔阿〕にも両方の意味を載せる。

オゲッタ（名）　嘘（うそ）。うそつき。〔神・領・上・羽〕※山川、脇町等、広い範囲で使われる。

オゴロ（名）　モグラ。〔神・領・上〕※上郡では、オグロモチ、ウグロモチ等。

オナメ（名）　牝（め）牛。〔神・領・上・羽〕※山川でも。ヘボン『和英語林集成』第３版（明治19年）に「ONAME

ヲナメ　牝牛」。

オバ（名）　尾。〔神・領・上・羽〕

オヘツ（名）　人にへつらうこと。〔神・領・上〕

オヨッサン（名）　お手伝いさん。下女。〔神・領・上・羽〕※美馬郡等でも。

カタチン（形動）　不揃いで一対にならない。釣り合わない。〔神・領・鬼＊〕

カタニナラン（句）　役に立たない。〔神・領・上＊〕

カバチ（名）　（家などの）外見、外側。外回り。〔神・領・鬼〕※〔阿〕に、「彼処ハカバチバカリジャ（あそこは外見だけ立派で中身は苦しい）」とある。また、橋本亀一『阿波の國言葉』にも「外見」の意で載せる。

ギチ（名）　車輪の小さい荷車。木などを運ぶのに使う。〔神・領・上＊〕※ギチより大きいのがセイリキ、さらに大きいのがダイハチ（大八車）。

キネリ（名）　（小麦粉などを）固めに練ったもの。〔神・領・鬼＊〕

キメル（動）　叱（しか）る。特に子どもを叱りつけたことを誰かに報告するときに使う。アイツ、キメチャーッタ（あいつを叱ってやった）。強調してキメツケル、ドギメルとも。〔神・領＊〕

クロクワ（名）　①石垣積みをする人。〔神〕②石工。〔領・上〕※〔阿〕は、「山畑等を開墾する人夫」とする。戦国時代、陣中の土普請等に従事した「黒鍬（くわ）」から。①の意味は、神奈川・長野・静岡・岐阜・兵庫などに記録されている。

ケソケソ（形動）　粗略に扱うこと、またその様子。〔神・領・鬼〕

コース（動）　（家などを）壊す。〔神・領・上・羽〕※コボツ（毀つ＝こわす）からの変化と思われ、愛媛県でコボスが使われているほかには、他県の方言集や方言辞典に記述がない。徳島だけの言葉かもしれない。

コギル（動）　小さく切る。〔神・領・上＊〕※主に、木に対して使われる。相生、上那賀でも。

コズク（動）　咳（せき）をする。〔神・領・上〕

コトヤケ（名）　大きなあざ。〔神・領・上〕※〔神〕は、赤痣（あざ）、〔領〕は青痣とする。〔阿〕は「色が赤いのをコトヤケという」とする。

サオトドシ（名）　①一昨昨年。〔上〕②一昨年〔神・領〕※共通語形は、サキオトドシ。なお、サオトドシを一昨年とすることは、金沢治『阿波美馬郡方言語彙』にその記録があるらしく、和歌山も同様。また、〔神・領〕では一昨日もオトトイやオトツイではなく、サオトトイ〔領〕・サオトツイ〔神〕となっている。

サダチ（名）　夕立。にわか雨。〔神・領・上〕※夕立の意のサダチは、徳島県内では、阿波・板野。上郡はユーダチ・ヨーダチ。

サツガイル（句）　無駄遣いしない。〔神・領＊〕

サビル（動）　箕（み）を使って穀物の中の塵（ちり）や屑（くず）を選り分ける。〔神・領・上〕※上郡でも。

ザマク（形動）　粗雑な。荒っぽい。〔神・領・鬼・上〕※〔阿〕では、「無秩序、不整理、不整頓（とん）、無節制」とする。

シケル（動）　人見知りして恥ずかしがる。〔神・領・上〕

シブケル（動）　（畳などが）湿気を吸っ

てじめじめする。〔神・領・鬼＊〕

ジョージュー（副）　常に。たびたび。〔神・領・上・羽〕※常住。

ショーゼ（名）　成長。肉体、精神、能力すべてについて言う。ショーゼガハヤイ（成長が早い）。〔神＊〕※他の資料に例を見ない。

シワイ（形）　夕方、仕事からの帰りが遅い。夜遅い。〔神・領〕※那賀川流域では、「執拗（しつよう）な、しつこい」、祖谷では、「意地悪い」、また「ケチ、吝嗇（りんしょく）」のように否定的な意味に使われる。神山では肯定的にも使われるようである。

シンダン（名）　葬式。〔神・領＊〕

スカマ（形動）　見当違い。反対のことを言う。〔神・領・鬼〕

ズツナイ（形）　苦しく、身の置き所がない思いがすること。〔領・上〕※術無し。

セツクロシイ（形）　狭く、窮屈な。〔神・領・上〕セツロシイとも。〔神・鬼〕

タイソイ（形）　大儀な。めんどくさい。〔神・領・上〕※上郡や県南では形容動詞のタイソーナが使われる。この形容詞化は、下郡で進みつつある。タイギナ（大儀な）からタイギイへの変化も同様。

ダス（名）　炭俵。〔神・領・上〕スミダスとも。〔神〕

チラグラ（名）　日暮れ時。〔神・上＊〕

ツッパリ（名）　支柱。支えの木。〔神・領・上〕

ツマシキ（名）　座布団。〔神・鬼＊〕

デコ（名）　人形。〔神・領・上〕

テダル（動）　同伴する。〔神・領・鬼〕

テンスイ（名）　物事に熱中する人。〔神・領・鬼〕

ドアンガ（名）　馬鹿。阿呆（あほう）。ドアンゴとも。〔領＊〕ドアンゴサク。〔上＊〕※ともに、「鮟鱇（あんこう）＝サンショウウオ」を語源とする形。主として下郡に分布する。

トテナシ（名）　しまりのない浪費家。〔神・領・鬼＊〕

ナカジャク（名）　中傷。〔神・領・鬼〕※〔阿〕では、麻植・阿波とする。

ナマボテ（形動）　乾燥せず、水分を多く含んでいるもの。〔神・領・上〕

ナリキモノ（名）　果樹。〔神・領〕果物。〔上〕

ナンシニ（副）　なぜ。何のために。〔神・領・上〕

ハズム（動）　賑（にぎ）わう。〔神・領・上〕

ハタク（動）　打つ、たたく。〔上〕粉にする。〔神・領〕

ハッチュウ（名）　①通行の多いところ。〔神・領〕②日当たりのよい開けたところ。〔上〕※②は木頭でも。

ハナグス（名）　鼻づまり。またそのような声の人。〔神・領・上〕

ヒボ（名）　ひも。〔神・領・上〕

ヒョカスカ（副）　時折。時々思い出したように。〔神・領・上〕

ヒョッカリ（副）　突然に。出し抜けに。〔神・領・上＊〕※美馬郡の記録がある。また長野・静岡にもあるらしい。ヒョッコリ・ヒョックリが共通語的である。

ヒンケル（動）　干抜ける。乾燥して小さくなる。〔神・領・上〕

ブコーナ（形動）　不器用な。不調法な。〔神・上〕※ヘラコイ（上手な）の

反対。

ブンブ（名）　水。幼児語。〔神・領・上〕※県下各地のみならず、比較的広く使われる。

ヘタコタ（副）　あれこれとたくさんに。〔領・上＊〕反対に。〔神＊〕※〔阿〕では「まごまご」の意を示す。

ヘダレル（動）落ちる。〔神・領・上〕

ホーキンサン（名）　お多福風邪。耳下腺（せん）炎。〔神・領・上〕※四国地域の方言か。高知は未確認。

ホーチャボ（名）　頬（ほお）。〔神・領・上〕

ホダツ（動）　ほこりが立つ。〔神・領・上〕

ホタル（動）　木が朽ちる。〔神・領・上〕

ボニ（名）　盂蘭盆（うらぼん）。〔神・領・上〕※「上郡」には収録されていなかったが、ほぼ全県で使用されていた（古い語形ではあるが）と思われる。

メンメヤチヤチ（副）各自気ままに。それぞれに。〔神・領・上・羽〕

モソゲル（動）　乱雑なまま、ひとまとめに押し込む。〔神・領・上〕※〔阿〕では、山分・上郡・祖谷となっている。

モブル（動）粉などをまぶす。〔神・領・鬼〕

モモグル（動）　①もてあそぶ。②いろいろと試みる。〔神・鬼・上〕※祖谷では、口の中でモグモグする意。

ヤーット（副）　長い間。〔神・領・鬼〕※エットと同系の語。

ヤネコイ（形）　粗末な。貧弱な。〔神・領・鬼〕

ユムギ（名）　ヨモギ。〔神・領・上・羽〕※山川もユムギ。上郡各地ではヨゴミ。〔阿〕では、「山分」とする。

リューケ（名）　畑の農作物。〔鬼＊〕※立毛。毛は作物のこと。かつては下郡で広く使われていたと見られる。穀物、野菜を含めて使っていた。『阿波の國言葉』だけがこの語を載せている。

5．おわりに

今回の調査に当たって、次の方々には特に時間をとってご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

上分　井上芳子さん　竹内治夫さん

鬼籠野　林　忠治さん

神領　鎌田茂尚さん

また、阿波学会総合学術調査の調査期間以外にもいろいろとご教示下さった方々のお名前をいちいち挙げることはできないが、あわせてお礼申し上げる。　（文責・仙波）

主要参考文献

神山町の方言集

鬼篭野村誌編集委員会編　『鬼篭野村誌』　1995

上分上山村誌編集委員会編『上分上山村誌』　1978
神山町成人大学編集部編　『神山の方言と言い伝え』　1990
名西郡神領村誌編集委員会編　『神領村誌』　1960

その他の方言集、方言辞典、言語地図
池田町誌編集委員会　『池田町誌』　池田町　1962
上村幸雄他　『日本言語地図』第１集　国立国語研究所　1966
金沢　治　『改訂阿波言葉の辞典』　小山助学館　1976
羽浦町誌編さん委員会『羽浦町誌』　羽ノ浦町　1995
尚学図書　『日本方言大辞典』　小学館　1989
高田豊輝　『徳島の方言』　教育出版センター　1985
西内滝三郎編　『一宇村誌』　一宇村　1920
西川治夫編　『井川町誌』　井川町役場　1982
橋本亀一　『阿波の國言葉』　国書刊行会　1939（1975復刊）
ひがしいやの民俗編集委員会　『ひがしいやの民俗』　1990
J.C.ヘボン　『和英語林集成』第３版　1886　丸善　（講談社学術文庫　1980）
平山輝男ほか　『現代日本語方言大辞典』　明治書院　1992
平山輝男・上野和昭　『徳島県のことば』　明治書院　1997

学術論文
上野和昭・仙波光明　「徳島市における３拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学』第６号　徳島大学国語国文学会　1993
森　重幸　「徳島県のアクセント概観」『国文論叢』第７号　神戸大学国語国文学会　1957
「徳島県のアクセント」『郷土研究発表会紀要』６・７・８合併号　阿波学会　1961
「分布図から見た徳島県の方言」　私家版　1962
「徳島県の方言アクセント概観――32年後の動向――」　私家版　1989
「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会　1982